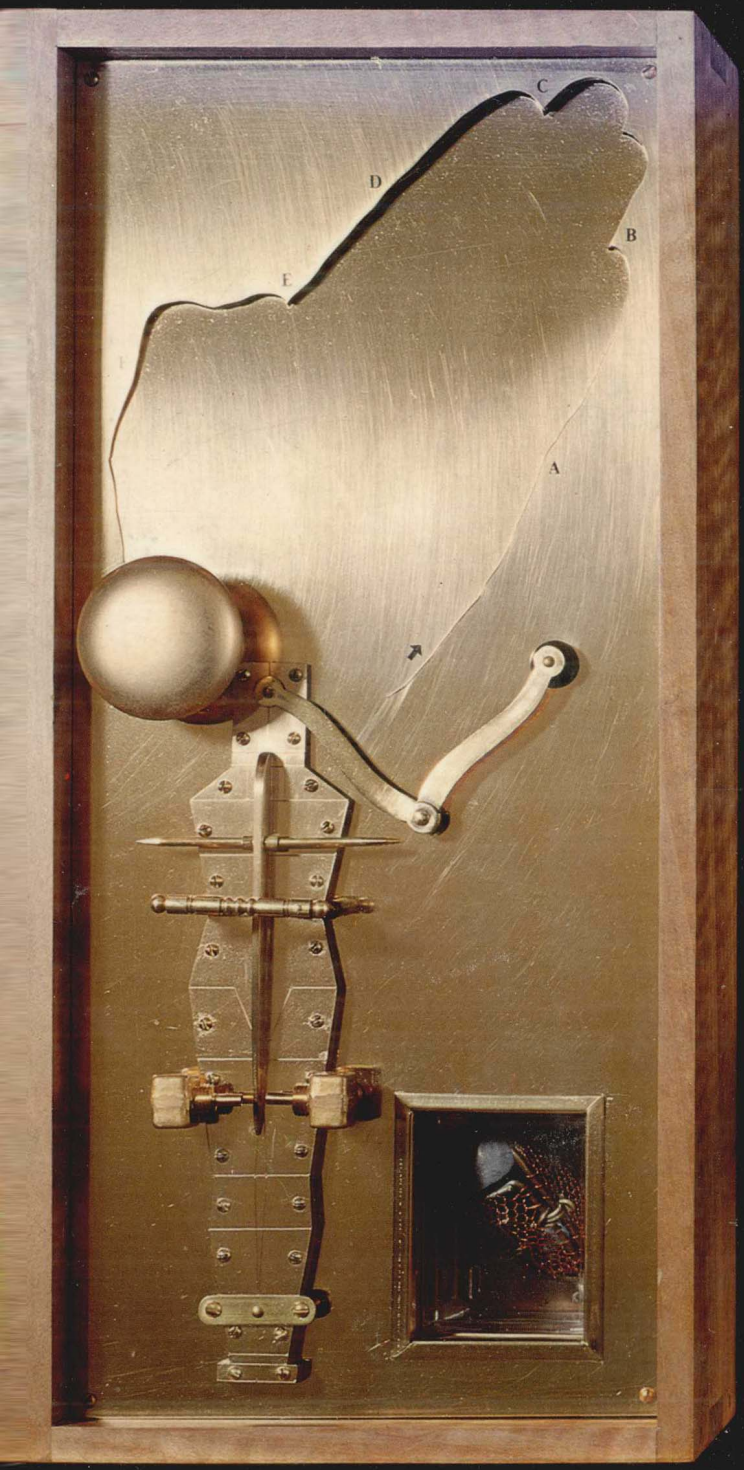

わたしは燃えたつ蜃気楼

吉増剛造

ねじ

水沢書店

吉増剛造　1939　東京生れ

詩集

「出発」　1964　新芸術社

「黄金詩篇」　1970　思潮社

「頭脳の塔」　1971　青地社

「王國」　1973　河出書房新社

「わが悪魔祓い」　1974　青土社

わたしは燃えたつ蜃気楼

昭和51年2月20日　初版発行

著者—吉増剛造

発行者—長谷川郁夫

発行所—株式会社小沢書店

東京都千代田区富士見2—8—5　Tel. 東京263—9218（代）

印刷—凸版印刷　製本—大口製本　付物印刷—精興社

© 1976 G. Yoshimasu 0095—135007—0791

目次

I

わたしは燃えたつ蜃気楼——「風」からパルメニデスへ　9
ブラジル紀行　21
処女航海　27
クレジオ・悪魔祓い　30
石の上で打つ音　35
記憶のオモチャ箱　37
聴覚の沖にみえている　42
古代歌謡の息吹き　46
聴診器を胸にかけて電話口にいる　50
頭脳が細かく揺れて　53
打ち靡く言葉　55
一語の魅力　60
深い浮世の奥へ　67

Ⅱ

大手拓次ノート　87
この黒いオルフェ——正津勉　101
ルネサンスの手紙——飯島耕一　105
イイヨシさんの鍵——飯吉光夫　110
皮ジャケットの縄文人——諏訪優　112
藤村と透谷　114
神秘的な表面張力——吉岡実　118
うねる眼差し——クロソウスキー　122
織物の記憶——豊崎光一　127
安東次男の眼　131
鬼の華・極の透視図——渋沢孝輔　164

Ⅲ

小川国夫——血のにおいのする織物あるいは街道感覚

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

流れ灌頂 209
眼・バリケード 210
殺意の誕生——東松照明 211
Nile, Shimokitazawa——淀井彩子 213
Fontainebleau の、森の——森仁志 214
葦の舟の、ラー——渡辺隆次 215
日陰かずらよ、サボテンよ 216
ユートピア？ と問われて 218
夜は千の眼をもつ 218
暗闇に酔う 221
水の輪廻 224
小田急に乗って何処へゆく？ 226
スペインの雲 228
冥府アムステルダム 230
アポロと夕陽 231
モーツァルトか朝日山——田畑あきら子 232
死の一方通行路——ダイアン・アーバス 238

川のほとりの古木の根かた――ベルイマン　249

Ⅳ

王国ノート　257
リズムの魔に吹かれて恋の山にいたる　263
引潮　269
危機感について　277
見ることを拒否する　283
虚空を指差す、そして叫ぶ　292
若者よ身体を鍛えておこう　308
ナルシシスムの復権　322
乞食の思想　338

装本　加納光於

わたしは燃えたつ蜃気楼

I

此为试读,需要完整PDF请访问: www.ertongbook.com

わたしは燃えたつ蜃気楼——「風」からパルメニデスへ

それは風が枝葉をさわがせるように不意にやってくる。その風が吹くと宇宙から霊魂が風にのってはこばれてきたような、そんな不思議な自由を感覚することができる。

その風景はぜんたいに暗緑色の色調をみせていて、ゆれる葉裏の、葉脈が静脈などの血管のように世界にむかって柔かな触手をのばしている。

風が吹く。生存の根源のところにうずくまっている恐怖心も静かにその風景のなかにとけこみ、やがて静かな口調で〝わたしの脳髄はみごとな惑星のかたちをしている〟とつぶやくようになる。

そんなとき人は風景と魂の中間に一歩を踏みだしていて、とある渡船場のようなところで一人途方にくれているのだ。半歩くらい彼岸へ踏みだしはじめているのだ。風景も、水が白紙に沁みこむように、こちらの肉体へたしかな足どりで浸入しはじめている。濡れるという言葉、そしてつづいて濡れる感覚が生ずるのはそんなときだ。

風がわずかに頬をなでて吹いてゆく。恐怖感や苦痛はないが、二、三歩まえを瀕死者のようなわ

たしに似た姿が歩いている。これは夢幻とも幻覚ともいえないわたしの一種の性癖のようなもののあらわれなのだろう。あるいは無意識のうちにあらわれる死の形象化であろうか。病いや老いが意識されているらしくその瀕死者はいつも老人である。少年の貌の老人。一九六七年の暮ごろ東銀座の裏通りを、仕事に疲れて茫然と歩いていたとき、この老人の姿が街角にみえたことがあった。古代ギリシャ哲学に熱中していたせいもあろう。その瞬間パルメニデス老人が街角に立っているのをわたしはみた。夢幻でも幻覚でもない。

風がわずかに頰をなでて吹いてゆく。パルメニデス老人も瀕死者も、ただふと心に浮んだ影像だった。そんなときには霊魂のようなものが、ふと傷口を外気にさらしているのだ。ごく自然に風景は魂の入口から入ってきて、人は風景と魂の中間に一歩を踏みだしている。

風にさそわれて渡船場に出てみる。

すこし淋しい、色彩は濃い緑色か暗緑色の、彼岸は霧につつまれて茫とけむっている。川は水量もすくなく、もう枯川の、死んでゆく川の姿である。

もう一年ほどこのような風景が、わたしの眼に微粒子が棲みついたように、風景がわたしの肉体にしのびこんでいて、わたしはこの風景の彼方へ歩いてゆくことによって死ぬらしいとつぶやく習癖が生じている。

これはやはり「精神的風景画」と呼ぶべき種類のものだろうか。しかし風景そのものとも魂の一状態ともちがう。

それは風が枝葉をさわがせるように不意にやってくる。たぶん言葉の出現である。風にそよぐ枝葉や緑の葉裏、そんな言葉ができているのは、言葉という、ひじょうな魔力と古い言語感覚を奥底

に病葉のように堆積させた文字の影響である。
言葉を言霊などといいなおすのをみることがある。
なぜなのだろう。わたしには言葉でじゅうぶんだ。なぜかわたしにはあれはひどく鈍感な響きだ。
風が吹く。言葉。

まことに歌うということは別の息吹だ、
何をめぐるのでもない息吹。神の中を吹きゆくこと。風。

（リルケ「オルフォイスに寄せるソネット」）

その別の息吹は、もはや対象的なものをあれこれと求めはしない。それは、何を求めるのでもない息吹である。歌びとの発言は、心情の世界内面空間の中に不可視的に納まっている現世的現存在の無欠な全体を、発言するのである。その歌はけっして言われるべきことの後を追ってゆくのではない。その歌は純粋な関連という全体への所属である。歌うということは、全き自然の未聞の中心の風の牽引によって引かれることなのである。歌はかくしてそれ自身「風」である。

（ハイデッガー「乏しき時代の詩人」手塚富雄・高橋英夫氏訳）

なぜか言葉のすきまから「風」がもれてしまうように感ずるのは、言葉の音韻のせいなのだろうか。ドイツ語は判らぬが、リルケの詩の原文は *"Ein Wehn im Gott. Ein Wind,,* とある。すると「イン、ゴット、アイン、ヴィント」という音が「神の中の、風」という詩句をあらわすのだろう

か。たとえば日本語の「風」「*Kaze*」という音だけでは、風は一ミリもうごきださない。リルケの詩の風(ウィント)は、おそらく "*im…Ein*,, *i* 音のみちびきによって動きはじめているように感じられる。

ハイデッガーのいう「全き自然の未聞の中心の風」とは何であろうかわたしには判らぬ。「純粋な関連」「未聞の中心」という言葉はハイデッガーを理解するためのキイ・ワードだろうが、そして詩の存在を暗示し、はるかかなたに幻の神像のようにそびえる、神的なるものの存在を暗示するのだが、ひじょうに透明ですみきった思惟が運動しているのがはっきりとみえるように感じられるのだが、言葉はこんなふうに出現し現在するであろうか。

歌はかくしてそれ自身「風」である。

この「風」はどうもおかしい。「*Kaze Fuku*」、カゼフク、風吹く風景の一点から歌がはじまるのではないか。認識のとだえたところから、風吹きはじめる、突如としてはじまる、言葉の爆発的な推力にわたしは眼をうばわれていて、それでわたしは盲目になっているのかも知れない。

歌うとは人間にとって疑いようもなくひじょうに神秘的な現象である。悲しいときに歌い、ふと我を忘れて歌いだす。

それは風が枝葉をさわがせるように不意にやってくる。その風が吹くと宇宙から霊魂が風にのってはこばれてきたような、そんな不思議なふるえやおののきを身体の奥底に感ずる。

歌う。論理的な説明もできぬまま、体験のようなものからくるわたしの考えを書く。歌うとは、人間が言葉を歌おうとしてひそかに努力している生々しい痕跡ではないか。歌を歌うのではなく、

言葉を歌う、あるいは言葉を言葉する。それではカナリヤみたいなもんだという罵声がわたしの耳もとでワーンワンなっている。そいつは詩の聖化だ、いい加減にしろという罵声だ。直接経験する日常生活の苦しみも考えろと。

凄い木霊だ。完全な沈黙、まったくものいわぬ無言の、恐ろしい影像が接近してきて、この言語活動の息の根をとめるのかも知れぬ。もっとも恐ろしい、完全な沈黙、しかも明かに存在している、それが神か。こんなモノローグはもうやめよう。

内部がひじょうに複雑骨折した人体、そのなかに浸入しつづけている言葉、風景をそのまま歌いだすと、すると狂気のような状態、言葉に憑かれた状態がやってくるようである。

書くこと、発語することはどうやらつねにそこ（憑かれた状態）に接近してゆく。たとえば次のような文章の書きだしが示しているはじまりの状態をどのように説明すべきか。奇妙なたとえでいえば、これは恋愛のはじまりのようなものだ。激しく胸をつく文章で、このじつに妖しい、心の運動、言葉の吹きあげてゆくさまは、忘れられぬものだ。

つれ〴〵なるまゝに、日暮し、硯にむかひて、心にうつりゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

（吉田兼好「徒然草」）

風が吹きはじめた。はじめの魔力が吹きはじめた。はじめの魔力、はじめの風なくしては宇宙も存在しえぬ。この古くて新しいはじまりをさがそうとターレスやピタゴラスの断片を読む。歌のはじまりを読みとろうとして……。

風吹きはじめる。熱度をもって一気に書きあげたもの以外は破りすてると語った（おそらくひじょうな憧れをもってそう語った）とおもわれる作家も次のようにいう。

書くことで僕は支えられているのだ。しかし、書くことでこういった種類の生活は支えられているのだ、といったほうがもっと正しいのではないのか？　こういったからといって、もし僕が書かなければ、僕の生活がもっとよくなるなんてことをむろん考えているわけではないのだ。そうしたらもっと悪く、狂気の沙汰に終わるにちがいない。……書かない文筆家、それはむろん狂気を引き起こす怪物なのだ。

（フランツ・カフカ「書簡」）

カフカの言葉をさらに発展させていえば文筆家にかぎらず、しゃべることをも含めて言語活動が停止すればほとんどの人間は程度の差こそあれ狂気のほうへ沈みゆくのではないのか。また書きはじめの魔力に憑かれて、その爆発的な言語の推力に身をまかせて行ったとき、なにが起るのであろう。どこかに究極的なヴィジョン、あるいは宗教的なもの、神が想定されぬとなにが起るのであろう。……ある転回点で危機を回避する、死。

誕生、死。朝から夜へ。

絶対的な自由、輝き。思惟それ自体が宇宙の鼓動であるような妄想。じつはこうして自我は極限的に閉じてゆきつつ、はかない空中楼閣に棲家を求めて、現実からのはてしない逃亡をくりかえしてゆく。恐ろしいことにそれがある必然性をもって……。キエルケゴールを引用しよう。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com